

その学校の第一印象は、教頭の対応如何で決まる。優れた教頭先生は、さりげなく駐車場で出迎え、ごく自然に案内してくれる。「やりすぎ教頭」のように「僕がんばっています」感を出すことなく、心地よく訪問させてくれる。そして、学校を去るときも、最後まで見送ってくれる。力が入りすぎず、ごく自然にである。

私は校長になってからも見送りの際には、外に出て、お客様の車が見えなくなるまで頭を下げていた。そうしていたのは、自分が校長を務める学校に赴任してきた新任教頭に、教頭のあるべき姿を教えるためでもあった。「やらなさすぎくん」や「やりすぎくん」ではなく「ほどほどさん」を目指したいものである。さりげなく自然な振る舞いには、普段からの心がけや経験が必要なのだと思う。日々鍛錬あるのみである。

教頭1年目に思ったことの一つに、「頼りにする先輩教頭を決めておく」ということがあった。教頭をやっていると、毎日毎日わからないことが出てくる。いくら調べてもわからないときがある。そんな窮地に追い込まれているときに聞ける教頭先生のことである。私の場合は、隣の檜沢小学校の教頭先生だった。頼れる先輩の存在は大きかった。

教頭2年目、3年目になると、「後輩教頭から頼りにされる」存在になりたいものである。私の場合は、近隣中学校の新任の教頭先生からよく電話がかかってきた。質問されると「それは〇〇の〇〇ページに出ていない？」と私が答える。すると、その新任教頭はすでにそのページを見ているのである。聞かれた手前、私も調べることになる。これが非常に勉強になった。私によく電話をくれた切れ者は、その後もご活躍中である。

石橋をたたきながら渡る教頭もいれば、石橋をたたかない教頭、石橋をたたいても渡らない教頭、石橋をたたいて壊す教頭など様々である。では、「石橋を築きながら渡る教頭」というのはどうだろうか。これからますます求められる教頭像ではないだろうか。教頭の仕事の魅力は、人材育成と特色ある学校運営である。

学校にとって、子どもにとって、先生方にとって、地域にとって、いいと思ったことは提案し、実現へ向けて行動していく。学校も教員も体質的に変わることを嫌がる傾向がある。世の中はどんどん変わっていくのに、学校だけが変わらないということがないようにしたいものである。

毎週金曜日に牛乳や食堂のラーメンで一息つき、土湯峠を越え、一路福島へと下っていくと、左前方に福島盆地の夜景が広がる場所を通過することになる。その夜景を見るたびに、「今週も終わった、帰ってきた」という安堵感に包まれ、週末モードに切り替わるのであった。このときは、奥会津からの帰り道で再びこの夜景を目にすることになるろうとは、夢にも思わなかったのであるが。

南会津の教頭時代を振り返るために、6号分も費やしてしまった。これでもかなり短縮版なのではある。思えば、南会津での3年4か月は、自分にとって教員人生の第2ステージともいえるものであった。それまでとは立場が違う。同じ学校という場所とはいえ、仕事内容が違う。「立場が人をつくる」という。これは、教頭に限ったことではない。学年主任や生徒指導主事、教務主任などもそうであろう。立場が人を成長させるのである。